

令和7年5月23日（金）

京都市社会教育委員会議第1回読書専門部会摘録

<主な意見（要旨）>

- 「読書ができる」という環境は、子どもの精神的な発達面で大事なことだが、同時に、「子どもの権利」とも言える。
- 読書がとても良い、すすめたい、という共通認識はあるが、大人がおしつけるのではなく、子どもたちを尊重し、子どもたちの読書環境を保障する方策を考えたい。
- 読書をしなくてもいいのではないかと考えている大人や子どもたちへの上手な届け方、具体の取組をどうすれば家での読み聞かせを負担感なく実施できるかを伝えることが重要。
- 子育てにとってメリットになるような現実的方策を伝えられたら良い。
- 保護者への取組か、子どもへの取組か、方向性が重要。
- 子どもが本に出会っていくきっかけが大事。子ども向けの本にとらわれずいろんな本にふれる機会をつくることが重要。
- 家庭によって読書環境がまったく異なるので、学校の役割は大きい。
- 家庭環境はなかなか変えられないから、公的なところになるべく本を置けないか。
- 学校の先生は忙しくて大変だが、ボランティアの方の助けもかりるとか学校で本に触れる取組ができないか。

<発言詳細>

○ 読書の意義について、酒井教授も現実的な効用についておっしゃっていた。子ども自身が困難に向き合ったときに読書が手助けになるよ、というようなことを伝えられたらと思う。リリアン・スミスも同じことを書いている。

「読書ができる」環境は、子どもの精神的な発達面で大事なことだが、同時に、子どもの権利、とも言える。

○ 自分自身すぐに結果は出ないけど、地道に取り組むことで想像力・集中力が身につくようになる、と保護者に伝えてきた。家庭によって読書環境がまったく異なるので、学校の役割は大きいなと思いながら読書に取り組むことを心がけていた。とは言え、先生にもゆとりがないと読み聞かせはできないので、読み聞かせボランティアにもお願いしながら行っていた。

○ 子どもが本に出会っていくきっかけが大事。

自分自身は、子ども時代にピーターラビットシリーズを繰り返し読んでもらった。

読み聞かせというと、子ども向けの本や絵本と思いがちであるが、自分自身は小学3年生のときに親に「古事記」を読んでもらった記憶がある。よくわからないながら、何かは子どもの中に残るので、子ども向けの本にとらわれずいろんな本を読みきかせてみることも大事と思う。

薄い本から分厚い本に移っていったきっかけは、親が読んでいた本を手にとって読んでみたところ、意外に読めておもしろかった、という経験だったのだろうか。親と同じ本を読んだら、その本について一緒に話ができる、それがうれしかった。

○ 読書がとても良い、すすめたい、という共通認識はあるが、どうしたらいいか。

押しつけがましくなってもいけないし、環境は整えないといけない。大人が、子どもが読書をしたくなる環境を作らないといけない。子どもたちができるだけたくさん本に出会えるようにするには、大人が押し付けるのではなく自分の読書体験をみずからの言葉で子どもに伝えることが大事。伝達の方法は何が正解かわからないが、子どもたちを尊重して成長段階に応じて行う必要がある。高校生なら、同じ本を読んで、お互いに考えたことを披露するようなビブリオバトル的なものも良いかと思う。

自分の体験としては、近くに図書館がなく、バスで1時間ほどかかったため、小学校の図書館しかなかった。片っ端から読んで、読書の時間には、同じクラスの15人ほどに、それぞれに合う本を選んで配ったことを覚えている。そのコミュニケーションがとても楽しかった。

読書へのアプローチの仕方は、考えて考えて考えすぎるくらい考えてよいのだと思う。

事務局 子どもたちを尊重し、子どもたちの読書環境を保障してあげないといけない。子どもの権利ということにつながるのではないか。

○ 気になったこと2点。

1点目。

このような会議に出席する人たちは、読書が大事であるという前提で話をしていると思うが、届けないといけない先は、読書をしなくてもいいのではないかと考えている人たちなので、その人たちに何を届けるのか、ということが大事だと思う。上手な届け方があるのか。

先生・親御さんも忙しい今、夜の読み聞かせの時間が取れない、負担になってしまう、という現実がある。読んでいる親御さんが楽しくなければ子どもさんも楽しくない。やはり親の想いは伝わってしまう。義務になってしまうとかえってよくない。

どうすれば家での読み聞かせを負担感なく実施できるかを伝えることが大事。たとえば、「寝る前に読むと良く寝てくれるよ」とか、「夜泣き、なくなります!」とか、親御さんが負担を感じることなく、メリットを感じて行えるような呼掛けができればいいなと思う。

中高生になると親子の共通の話題がなくなってくる。そういったときに、同じ本を読んでいたら、共通の本の話題があれば、意外に盛り上がるので、思春期の子育て期にも役に立つことがある。そのように子育てが楽になるような現実的方策を伝えられたらいいのではないかと考えている。

2点目は、読書環境が違う、という話。

日本版ブックスタート事業は、本を通じて親と子の温かいひとときを、という理念を示して

いるが、もともと発祥の国である英国では、本が1冊もない家庭（貧困家庭や読めない家庭）をなくそう、という取組として始めている。

日本では、絵本をプレゼントすることがメインの取り組みになっているケースも多い気がするのですが、誰に届けるのか、ということを改めて意識することも必要ではないか。

事務局 上手な子どもたちへの届け方、本が嫌いな子にどう届けたらいいか。

○ 本を読まない子にどうしたらよいものかと実験のように、朝、できるときは読み聞かせをしてみるが、それでも読まない。

○ わが家のトイレでは、狭いスペースに奥行き15cmほどの薄い本棚を入れているが、「トイレ文庫」が効果的かも。意外と本を手取る。
自分が読んだ本を黙って食卓に置いておいたら、子どもが自然に読み始めるということもあるかと思う。

○ 自分が読んだ本をリビングに置いておくと、子どもが手取る、というのは確かにある。すぐ手に取れるところに本を置く、というのは入口にはなるかも。

○ 子どものころ、一緒に選んだりすることがいいのかもしれない。
何が好きだったっけ、などとしゃべりながら本を選んで手渡すと、意外に興味を持って読んでくれる。
一緒に本屋さんへ行って、ただ、ただ歩きながら関心がないことを一生懸命しゃべって、しゃべってるうちに、この本どうかなという流れになって手渡したりしていた。
本屋さんへ行って、自分で好きな本を選びなさいと言っても選ばない。
その子のために選んであげる、ということを、手間はかかるがしてあげるといいのではないか。

○ 親子で同じマンガを読んで、日常のいろんな場面でセリフの掛け合いでマンガを再現する遊びも楽しい。会話を発展させて、知的なゲームみたいになると面白い。

○ 家庭環境はなかなか変えられないから、公的なところになるべく本を置くことが大事。
幼稚園や保育園は、その園によって本があるところとないところの差が大きい。
保育園は教育機関として設置されていないため、幼稚園ほど本が置かれていないことがある。
読み聞かせを何歳までするか、というのも考えることが重要である。
読める子をほっといてしまうと、そのうち読まなくなってしまうので、読める子へのサポートも重要である。
フィンランドでは「13歳までの読み聞かせ」という言い方で、子どもが望む間は読み聞かせをしましようにと提案している。
また、絵本である必要はない。

学校の先生は忙しくて大変だけど、やはり何か学校で本に触れる取組ができるといいなと思う。クラスによって、読み聞かせがあったりなかったりするというのが現実にはあるので、学校が企画して読書ボランティアの方の力を借りてもよいし、学校から本を借りて家に持ち帰ることによって親御さんも子どもの読んでいる本に関心を持ち、本が家庭になじんでいく、ということも考えられる。

どっちからアプローチするか、親御さんからか、お子さんからか、ということも考えてはどうか。

事務局 貴重な意見をいただいた。読書の意義やどう発信していくかという点について、また御意見をいただけたらと思う。

出席者：

読書専門部会委員

部会長： 松田 規久子委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

副部会長：岩崎 れい委員（京都ノートルダム女子大学教授）

豊田 まゆみ委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

永田 紅委員（歌人、京都大学大学院農学研究科助教）

生涯学習部

有澤 重誠 教育委員会生涯学習部長

松下 誠太郎 教育委員会生涯学習部首席社会教育主事

嶋本 公一 生涯学習部学校地域協働推進課長

小田 有希子 生涯学習部家庭教育事業係長

※職名等は令和7年5月23日時点